

# 江戸後期 筑前閨秀展

—— 亀井少榮・二川玉篠 ——



少榮「於多福図」

主催/財団法人 亀陽文庫 能古博物館  
 共催/福岡市・福岡市教育委員会  
 後援/福岡県・福岡県教育委員会・西日本新聞社  
 NHK福岡放送局・テレビ西日本

会期/平成4年4月7日(火)~6月28日(日)  
 月曜休館  
 (月曜が祝日のときはその翌日)  
 会場/亀陽文庫 能古博物館

## 季誌 能古博物館だより

企画展開催記念発売  
 『閨秀亀井少榮伝』  
 総頁数 155頁  
 特殊紙・布装  
 (カラー60頁を含む)  
 定価 3,000円税込  
 送料 310円

### 少榮 玉篠 両女の後嗣づくり

江戸時代というのは、一般の庶民には息が詰まるような日々であったと思います。その最大の原因は身分制度です。

武士は、為政者として庶民(農工商)の上に位置づけられますが、武士にも厳として階級があり、下級士、足軽などは上級士に対して頭が上がり、これまた終生、永代にわたって窮屈、よほどのことがない限り上級にはなれません。

こうした身分と階級は天理により天分(天が分けた)という觀念を強制されていたわけです。その教義は、中国伝来の儒学に基づく朱子学を巧妙に延用したもので、すべて神君(徳川家康)御採用の学として朱子学派の看板にします。儒学を根幹にして教理を立てた学派に陽明学、古学派があり、大いに朱子学派に反撥して、その矛盾を指摘しますが、徳川幕府によって処分されます。

その一つが、わが福岡における亀井南冥の受難です。

有名な福沢諭吉は、「身分と階級は親の仇でござる」。また、「天は人

の上に人をつくらず」と、名言にし、「わが先生は亀井が大信心で……」などとも言っておりますが、彼の師は中津藩の白石照山で亀井昭陽を熱心に私淑していました。

この福沢諭吉の言葉も、すべて明治になってのことで維新前に言っておれば、南冥同様に終身拘束は免れなかったと思います。

しかし、こうした開明派によって近代はつくりられ、旧体制の中において福沢諭吉などは上手に勉強、その知識をものにしたわけです。

詩、書、画、この文芸趣向は、身分階級の外に立つ一つの生き方であったと思います。そして、亀井少榮、二川玉篠などは、ともに父親が開明的な思想を持っていたこと、これが、彼女たちに大きく作用したことは否めません。

いま一つ、両女に共通性があるのは、どちらも後嗣つまり家を継ぐ子孫を得ること。少榮は、一女を失った後、弟の二男を一歳で引き取る、つまり養子にして上手に勉強させた。玉篠は、三十九歳で二十七歳の夫を迎えて三年後、美事に男子出産という当時の女性年齢からは神わざに近い願望達成を得ました。

(亀陽文庫 理事長 庄野寿人)

小書謹呈、岩今朝急に帰り、

不一、昨歸路健足、自娘還歸、

道太所宗也、迎、未、晚、景、達、家、

道、偶、管、藏、安、心、無、事、六、日、

欲、下、着、帷、子、附、便、不、誌、疎、也、無、

恨、不、可、加、介、夜、皆、無、事、無、

流行、也、心、他、期、後、使、不、具、

七月朔

夫君足下

小妾友拜呈

少稜の夫雷首宛書簡 (訓読)

小書謹呈、岩今朝急に帰りを請う故不一。昨歸路は健足。姪浜より道太郎帰り、宗、迎え来り、晩景に家に達す。道に偶、管藏に安んず。友は安心此の上は無し。今日、下着帷子を作り便に附せんとするに能わず。残念限り無く、如何すべからず。家は皆無事。流行無し。安心。他は後便に期す。不具

七月朔

小妾友拜呈

夫君足下

### 亀井少稜書簡

「江戸後期 筑前蘭秀展」では

亀井少稜の書画類だけでなく、少稜女史の私生活を垣間見せる

書簡類もご覧いただけることとなりました。現在、福岡市今宿亀井家には少稜が母や夫、息子にしたためた書簡をはじめ、文政四年、雷首・少稜夫妻が今宿に分家してから、明治十九年に少稜の息子雋永が亡くなるまでの六十五年間にわたる書簡、記録が遺されています。既に、福岡県文化会館により調査がなされた七〇二点の資料に、新しく発見された多数の資料を加え、その中から数点を展示いたします。

上段右の書簡(縦一六・二×横五七・四釐)は、少稜が夫雷首に宛てたもので夫の留守を守る少稜が、近況を報告するとともに、夫が安心するように気遣った手紙です。初めに出てくる人、岩は使用人。道太郎は親戚の青年。宗は昭陽の四女、少稜の末妹で、少稜宅に手伝いに来ているところです。日付は七月朔となっていますが、少稜夫妻が今宿に移転後、紅染誕生前、つまり文政七年のことではないかと思われまます。

上段左(縦一六・二×横五九・五釐)は、多数残っている少稜の後嗣雋永宛書簡の一通です。本紙は左から巻き、右端の巻き終わりがとじ目となっており、表書きの「雋永殿母より」の字が紙を透かして見られます。日付は二月二十一日認となっており、十一項目が設けられています。その第九項目には、「一、母は一昨年以來のもとの書画を日々書き申しおり候。書画がなによりまぎれてよろしく候。」と記され、少稜がいかに書画を書くことを楽しみにしていたかが偲ばれます。

末文の「若様云々……」は嗣子雋永のことで、珍しい母少稜の茶目っ気とされています。

また、第一項目には雋永の訪問先より以前から頼まれていた少稜作書画の贈呈に関する記事もあり、興味深い書簡です。

左の書簡(縦一六・五×横八一・五釐)は少稜が母に宛てたものです。上段の二通とは違いひらがなで書かれています。年末のあわただしさの中で書かれたものらしく日付は十二月二十七日と記されています。娘の紅染の手習の様子などが報告されているこ

本月六日無事ニ大坂着之書、十六日叔父博多ヨリ持チ帰り、十九日ニ兄君今宿ニ持来ル。忻々止ムベカラズ、ドラシタ速ナルコトニ候ヤ。九日ニ鮮ヲ作ル、其日足下硯海渡リノ書達ス。十九日ニ又鮮作ル。順也告ゲテ曰ク、今日大坂ヨリノ書来ルモ知ルベカラズト。果シテ然リ、果シテ然リ。

先日、叔父ト談ジ、足下ノ誕生祝ヲ三月

十一日ニ致シ候。又、當ニ酢ヲ作ルベシ其

頃ハ江都着ノ書相違シ候ハン。

一 嘉介へ贈セザルコト心に懸リ、忘ル可

カラズ候、ヨヲヤク案ジ付キ、書画ヲ送

リ申シ候。此ノ内五六枚お遣シ成サルベ

ク候。

本音奇血事、大坂着、或、夫、叔父



亀井少梨 (一七九八〜一八五七) 作品



「扇面 自題 淡彩桜花図」(15.6×36.0)



「色彩 野菊図」(21.4×29.0)



「自題 式亀図」1856年作 (37.6×54.2)



「仙厓賛 竹図」1831年作 (95.8×36.2)

今回の企画展では、少梨が得意とした四君子はもちろん、他の植物や生物、画稿にいたるまで、生活史料も含めて約百点を展示いたします。

豪快な筆運びの菊図など、少梨の人柄を見るようですが、ここに掲載した作品は、その中でも特に丁寧に仕上げられたものでしょう。「仙厓賛竹図」(上)には「女子進退は竹に

於て焉を見ず」という仙厓の賛があります。当時少梨は三十四才、仙厓は八十二才。これが仙厓の少梨に対する訓戒の言葉であるなら、とても面白い作品です。

「自題式亀図」(左)は亡くなる前年の作品です。亀井家隆盛の時代を築いた五亀(南冥・昭陽・曇栄・大莊・大年を五亀と称した)もすでになく、彼らを偲び自分と息子雋永を式亀として描いています。少梨らしからぬうら寂しさが漂います。

二川玉篠(一八〇五〜一八六五)作品

「相近賛 雪梅図」(95・2×30・0) 福岡市博物館所蔵



「相近賛 梅図」(114・8×28・0) 福岡市博物館所蔵



「相近賛 雪梅図」(94・0×30・5) 福岡市博物館所蔵



少柴と玉篠。お互いに直接交流はなかった。玉篠の父相近(すげちか)は、少柴祖父南冥の初期の弟子。しかも唐人町の亀井家と二川屋敷は約

百米の近さであったが、とくに両家の交際はなかった。後に亀井家は百道に移転。少柴は玉篠に六歳の年長である。

次に、玉篠作品を少柴との比較で述べる。上段左側二点の絵は、雪中に固い蕾(つぼみ)を見せる梅。右は夜景の梅

これも梅花とするに早い図である。右下段は、色彩で爛漫の桜花図、いずれも少柴にない図柄である。

玉篠図の特徴は、淡墨で画面を薄暗くして雪景の梅、或いは夜の梅を表現する手法、また色彩で桜花、その樹幹を手荒いタッチで描く画法。これらは少柴に見られない。少柴は、白地に梅花を具象的に描く。また絵の対象は、少柴は多種多様に及ぶ特長があり、両者画技の上下は論外にする。

「相近賛 桜花図」(132・0×29・6)



「相近賛 梅花図」(105・5×30・5)



関秀画家

ふたかわきよくじょう

## 二川玉篠概説

### ●二川相近の女玉篠

二川瀧子(のち玉篠と号する)。以下本文中は玉篠とする)は一八〇五(文化二年、二川相近(一七六七〜一八三六)の二女として柗木屋町(福岡市中央区)に生まれる。

父相近は福岡藩士であり、書家・今様の歌人として知られる。二川家は、代々藩の料理方で、祖父の相直は御料理人頭を勤めた人である。相直はかつてより儒者亀井南冥と親しく、息子の相近は亀井塾に入門させており、相近はその影響で経政の学を志す。十六才からは書道に専心、二十八才のとき料理方の家に生まれながら、福岡藩主斉隆公より書道師への転業を命ぜられる。琵琶を得意とし、和歌や今様にも巧みな人であった。しかし、とくに病身のためという理由があったわけでもないようだが、亡くなるまでの三十年間は、自宅より門外へ出ようとはしなかった。

玉篠には鶴子という十才年長の姉

があるが、鶴子とは母を異にしてゐる。玉篠の母は中村氏の女であるが、相近にとつては二人目の妻である。姉鶴子の母である妻は、菅氏の女で、長男旗男が四才で早世した後、それが原因であろうか相近は鶴子の生母を離縁したのである。

玉篠二才のとき(一八〇六年)祖母(相近の実母)が亡くなるが、父相近が終生

三十年にわたり家を出なかつたのはこの少し以前頃からだといわれる。相近はかたくなとも思われる頑固さで外出を拒んでいたよう



玉篠「竹図」(27.5×18.6)  
福岡市博物館所蔵

態度は、石松元啓著『二川相近傳』の中の「(相近は)その帯の中より、三、四寸の筆の軸の切りたるを出して見せ、朝夕机にのぞまざるの間、また、無用の客来たりて、長話する時、尤長夜にて、寝覚めせし時など、これをひねりて、人知れず筆法を練習するといえども、その志を得ずと、歎息せられき。時に六十余歳の時な

り。」という記事より伺い知ることができる。

### ●鶴子と玉篠

玉篠と姉の鶴子の姉妹は、才女として評判の二人であった。この姉妹が教えをうけたのはもちろん父相近であり、父は娘たちに書、画、音楽

蹴鞠などをはじめ、高い教養を身につけさせた。

玉篠は、書に閑して、『大指の頭の腹に人指を以て、字書修行するに、いか程の大字もいか程の小字も書かるるもの也』と教えをうけ、そのことばは指導の一端を物語るものとして相近伝にのこる。画を最も得意とする玉篠の作品には父相近の描いたものと見分けがつかないものも多く、和歌はあまり詠んでいないようであるが、音楽は父の仕込みにより姉妹ともども心得、管弦音楽にはその一員として加わった。また、玉篠は、運動神経も発達していたようで、蹴鞠も特技のひとつであったようである。

鶴子は琵琶を弾じ、玉篠は琴をよくしたが、姉妹はいろいろな意味で対照的な性格の女性であったといわれる。相近の外事秘書的な役割にあったのは玉篠で、彼女は画風からもうかがえるように、活発、いわゆる男まさりの性格であった。一方内事秘書的な役割をこなしたのは姉の鶴子であり、彼女は温和な性格と優れた記憶力で信頼を得ていた。

この姉妹は、鶴子が四十歳(後に友古と称する藩医鶴原氏の子息方作を婿とするが、子はうまれなかった)、



玉篠「菊図」(66.8×39.0)  
福岡市博物館所蔵

玉篠が三十九歳のときにそれぞれ結婚している。当時としては、非常に遅い結婚であり、それも相近が亡くなった後のことである。二人の娘は、それぞれの性質を生かして父を助けたのであろうが、家族の様相としてはかなり個性的である。外出嫌いの父親と適齢期を過ぎた未婚の娘たち、風変わりな家だと好奇の目をむけられることもあったであらう。しかし、彼女たちはこのような家庭環境の中で存分に才能を育み、殊に玉篠は独特の個性を発揮、閨秀画家として晩年まで活躍する。奇抜とも思える構図や筆遣いの作品が目につくが、それらを描かせた豊かな感性は、父相近の世間の常識にとらわれない自由な教育の中でつちかわれたものであろう。

### ● 玉篠の結婚以後

しかし、一八三六(天保七)年その父も亡くなる。長い間外出することを拒み続けたにもかかわらず、藩には重く扱われた存在であった。享年七十歳であった。

一八四三(天保十四)年、玉篠は野村貞實の二男鉄太郎と結婚。当時玉篠は閨秀画家として才媛の名をほしいままにしていたが、年齢はすでに三十九歳であった。

これに対し、夫の鉄太郎は二十七歳。十二歳年下の婿である。鉄太郎の父野村新三郎貞實は、福岡藩士で、その後妻が有名な女流動皇女であり歌人の野村望東尼である。野村夫妻は、大隈言道を師として入門していたが、大隈言道は相近の門人でもあ

り、相近は言道をとおして野村夫妻と親交をもっていたと思われる。二女の玉篠を迎える婿のことも、折りにふれて夫妻に話していたであろうし、野村夫妻も相近やその娘たちの学才に少なからぬ畏敬の念を抱いていたのではないだろうか。このようにして姉鶴子と友古夫妻の間に子供がなかったこともあって、鉄太郎は玉篠の婿として迎えられた。玉篠の夫鉄太郎という人は、のちに幸之進相遠と称し、国学、和歌などのたしなみ、武芸にも秀で、書家としての家職を襲う。性質はいたって温和な人であったらしい。当時評判の閨秀画家玉篠が、十二歳年下の優しい印象を伝えられる鉄太郎と結婚したのは、二川家の家督を嗣ぐものの誕生を望んでのことであらう。

念願かなって、結婚後三年たった一八四六(弘化三)年二川家の嫡子幸之進が出生する。そして同年玉篠の結婚と二川家後嗣の誕生を見た玉篠の母は安堵のうちに永眠につく。

しかし、それから十年後の一八五八(安政五)年四月、夫鉄太郎は四十二歳で妻子を遺して世を去る。当時玉篠は五十四歳であった。しかし、未亡人となってからもその才名をますます高くしていった。

そして、一八六五(慶応元)年四月、二川玉篠は享年六一歳の生涯を閉じ、円応寺二川家の墓に眠る。

相近は、玉篠と鶴子をそれぞれの性質に応じて教育し、それぞれを愛し、彼女たちも父をこよなく敬慕した。相近を中心とした鶴子、玉篠、そして母、彼らの間でどのような精神的交流がなされたのか具体的な事実はほとんど残っていない。しかし、玉篠を語るとき、相近の影が常につきまとう。そして、玉篠の結婚は、当時としては最も重要とされたことなのであろうが、いかにも二川家の後嗣を遺すためという様相を呈する。もし、友古、鶴子夫妻に後嗣が生まれていれば、玉篠は生涯独身で一心に書画を書き続けたかもしれない、などと筆者は想像する。それほどに玉篠はユニークな女性であったであらう。その玉篠の才能を開花させたのは相近である。

#### 出典・参考文献

- (1) 前田淑著「福岡藩幕末歌人二川鶴子―その家系・生涯・作品―」
- (2) 二川龍三郎著「二川相近風韻」
- (3) 石松元啓著「二川相近傳」(2)に掲載
- (4) 春山育次郎著「野村望東尼伝」
- (5) 西日本新聞社「福岡県白科事典」

江戸後期筑前閨秀展主な出品目録

亀井少梁(一七九八〜一八五七)

作品名 制作年

材質形状

備考

所蔵者

於多福 図 自題

紙本墨画淡彩・掛幅 「図象写形萬古抑止」

個 福岡市博物館

竹 彩色野菊 図 仙厓賛

紙本墨画・掛幅 「女子進退竹於見焉」

個 福岡市博物館

竹 彩色野菊 図 雷首賛

絹本淡彩・掛幅

個 福岡市博物館

竹 彩色野菊 図 昭陽賛

紙本墨画・掛幅 「孝筭満庭千祥萬福」

個 福岡市博物館

扇面淡彩桜花 図 自題

紙本淡彩・掛幅 「飛琴上」

個 福岡市博物館

高士遊歩 図 自題

紙本墨画淡彩・掛幅 「画中に署名が生かされた作品」

個 福岡市博物館

山 水 図 自題

紙本墨画淡彩・メクリ

個 福岡市博物館

鶴 水 図 自題

紙本墨画淡彩・掛幅 「堂有真人在相偕延大齡」

個 福岡市博物館

式 亀 図 自題

紙本淡彩・掛幅 「亡くなる前年の作品」

個 福岡市博物館

詩 画 卷 自題

紙本淡彩・卷子 全長七・六五メートル

個 福岡市博物館

蘭 竹 図 自題

扇面墨画・扇面 扇面は他九点を展示

個 福岡市博物館

葡萄(画稿) 図 自題

紙本淡彩・メクリ

個 福岡市博物館

習 行 書 字 一八〇六

紙本墨画・掛幅 少梁九歳の作品

個 福岡市博物館

一 行 書 字 一八〇六

紙本墨画・掛幅 当時の採点表

個 福岡市博物館

亀井塾點取表 一八四七

紙本・布・長帖 衣類整理の覚え書き

個 福岡市博物館

衣類大数備忘 一八四七

紙本・布・長帖 衣類整理の覚え書き

個 福岡市博物館

二川玉篠(一八〇五〜一八六五)

桜 花 図 相近賛

紙本着色・掛幅 桜花とともにその幹が構図にいかされた作品

個 福岡市博物館

梅 花 図 相近賛

紙本着色・掛幅 背景に墨色が施された作品

個 福岡市博物館

雪 梅 図 相近賛

紙本着色・掛幅

個 福岡市博物館

梅 梅 図 相近賛

紙本着色・掛幅

個 福岡市博物館

雪 梅 図 相近賛

紙本着色・掛幅

個 福岡市博物館

竹 梅 図 相近賛

紙本着色・掛幅

個 福岡市博物館

菊 竹 図 相近賛

紙本着色・掛幅

個 福岡市博物館

編集後記

本誌好評連載中の亀井少梁(一七九八〜一八五七)を中心とした企画展を開催することになりました。少梁は亀門学の大儒・南冥の孫、昭陽の長女として学問に励み、家塾の発展に大いに貢献したといわれます。これは女性の社会進出が常識になかった当時としては希有のことであり、注目に値する存在です。また、同時期閨秀画家として評判であった二川玉篠(一八〇五〜一八六五)の作品もあわせてご覧いただき、江戸後期を生きた二人の女性の詩書画三絶の技をぜひご鑑賞いただきたいと思ひます。

また、今展覧会につきましては、亀井准輔、秋子ご夫妻、福岡市博物館渡邊雄二氏をはじめ学芸課の方々、福岡市民図書館首藤卓茂氏より多大のご協力をいただき、二川玉篠に関しては、福岡女学院短期大学前田淑先生よりご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。(松尾)

江戸後期 筑前閨秀展

亀井少梁 二川玉篠

平成4年4月7日(火)〜6月28日(日) 9:30〜17:00・入館は16:30まで 月曜休館 月曜が祝日の場合は翌日 一般500円、学生・65才以上250円

主催：財団法人 亀陽文庫 能古博物館 共催：福岡市・福岡市教育委員会 後援：福岡県・福岡県教育委員会・西日本新聞社 NHK福岡放送局・テレビ西日本 亀陽文庫 能古博物館

福岡市西区能古522-2(姪浜からフェリーで10分) ☎(代表)092-883-2887・FAX883-2881